

### 利子論(最終講義)

UNO, Kozo / ウノ, コウゾウ / 宇野, 弘蔵

---

(出版者 / Publisher)

法政大学社会学部学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

社会労働研究 / Society and Labour

(巻 / Volume)

14

(号 / Number)

4

(開始ページ / Start Page)

150

(終了ページ / End Page)

179

(発行年 / Year)

1968-03-15

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00017804>

# 利子論〔最終講義〕

宇野 弘 蔵

私の最終講義は利子論ということになったのですが、この利子論というのが私の場合は『資本論』の説くところと相当違っているので、問題点が非常に多いわけです。私自身『資本論』では利子論がいちばん欠点をもっているんじゃないかと思っている。ほかの部分は、それまでの経済学でも、あるいはその当時の経済学でもある程度まで論ぜられていますが、利子論はそれまでにもあまり発展がなかったといつてよいんじゃないかと思う。その点は、経済学史的には非常におもしろい問題じゃないかと思うのですが、それはともかくマルクスでも利子論は利潤論や、あるいは地代論やなんかと同じような程度にまでは確立していません。利子論は利潤論や地代論と同じような前提をもってなされていらないと思う。展開の順序も問題だが、理論的展開の前提となる想定が非常に悪い。貨幣資本家と機能資本家とがいて、その貨幣資本家が資本を貨幣の形で機能資本家に貸してやるというのです。こういう想定は利潤論や地代論では考えられないことです。

つまり資本家が自分で資本を投じないで、人に貨幣を資本として貸してやるという。そういう想定は利潤論でも地代論でも出てこない。これはもちろん実際上の問題としては、そういう想定をしてもいいような事情が大いにあったんでしよう。ラムジーによってマルクスはいつているが、例えば引退した資本家が有能な青年実業家に金を出してや

る、いわゆるパートナー・シップというものでしょう。そういうものを考えて、それで利子論をやっている。つまり、この無一文の有能な実業家が機能資本家として借りた貨幣を資本として利潤をあげ、その一部を利子として貨幣資本家に支払うというのです。

しかしこれでは貸付資本の利子にはならない。先ず第一に、その貸付ける貨幣は一定の期限をもったものではない。むしろ反対に機能資本家の手で利潤をあげる期間が貸付の期限になる。これではその期限の来るごとに全資本を返えしてまた借りなければならぬ。機能資本家は貨幣資本家の代理をしているとするほかはない。しかし誰でも知っているように、利子というのは必ず一定の期限をもって貸し付けられた資金に対して支払う代価である。そんなことはマルクスも非常によく知っているはずなんで、たとえば資本の流通過程を論ずる『資本論』の第二巻ではマルクスも、資本の運動過程中には必ず貨幣資本として多かれ少かれ一定の期間遊休しているものが出てくる。そしてそれがいろんな資本家の間で融通されるという関係が近代的な信用制度の基礎をなしているといっている。これは貸すほうの側が一定の期限をもった資金を貸すんで、ただ貨幣を資本として出して、相手がそれを資本として使って、利潤をえて、その内の一部を利子として支払うというようなものではない。事実、それでは利子率も決らない。マルクスの例解のような二人の資本家の間では、ただ個人的にあるいは已に市場で決った利子率によって決定するほかはない。これでは利子を理論的に規定するわけにはゆかない。また、今もいったように借りた資本を返してしまったら、この機能資本家は資本をもっていないことになるんで、また借りなくちゃならない。結局どういことをいっているかという、この貨幣資本家と機能資本家の関係というのは、それが一体になって資本を投じて利潤を得ているといことをいっているより以上のことをいっていないことになり、利潤論の中に入ってしまう。

そういうわけで『資本論』では利子論の出発が非常に悪かったんじゃないか、こういうふうに思う。『資本論』の利子論もその後半は銀行信用の問題をやっているんで、結局そこに帰着する。

ところがまた銀行で扱う資金というのがどういう貨幣かということが問題になる。マルクスのいうような貨幣資本家とか、あるいは現在われわれの周囲で見られるような種々雑多の預金者とかの貨幣によったのでは理論的には規定できない。産業資本の運動の中から出る資金として一定の期限をもって貸し付けられるというものでなければならぬ。一定の期限がくると、例えば三カ月先にはどうしてもいるような貨幣、あるいは一年先にはどうしてもいるような貨幣を、この三カ月間、あるいは一年間、銀行へ預けるとか、人に融通するとか、そういうのでないと利子は原理的には規定できない。それはちょうど地代論で、産業資本家に対立する土地所有者を想定しなければならぬということと同じことで、そこに資本家や直接の生産者が土地を所有するという想定では地代は規定できない。そういうわけで『資本論』は利子論の出発点で利子を理論的に規定できないようになっていた。

次に、それと関連することであるが、マルクスはそこで直ちに資本が商品になるというふうになってしまう。資本を商品にするということになると、利子がなにかわからなくなる。多くのマルクス主義経済学者諸君は、これを資本の物神性を示すものといっているが、これでは資本の物神性は、資本が例えば有価証券のように商品として売買されるときにあらわれる、資本の商品化としては説けなくなる。そこではじめて、資本はいわゆる擬制資本として利子を生むものとして売買されるのであって、その場合は利子は代価じゃない。資本は利子を生むものとして商品になる。貸付資本のほうは貨幣を貸して利子を取る。利子はその貨幣の一定期間の使用価値に対する代価なので、資本の代価じゃない。その点がどうしてマルクスにはっきりしなかったのか、むしろ不思議なんです。

そういう意味で利子論といのは非常に出発点が悪かったんじゃないか——こういうふうに思うんです。これはもともと利子論を利潤論や地代論のように純粹の形で考えなかったためだろうと考えられるが、それと同時にその展開の順序も、よくなかったのではないか。

私の場合、利子論の中へ商業資本を入れているんで、あるいは妙に思う人が多いかも知れないが、決してそうでない。産業資本にとっては貸付資本も、商業資本と同様に、産業資本にとって始末のわるい流通費用を節約するという意味をもっているんで、その点では同じ任務をもっている。もちろんその出現の場面も違うし、機能も違うので、同じにしてしまうわけにはいかない。

片一方は遊休している貨幣資本をできる限り生産資本化するもので、銀行がその仲介をなし、銀行資本の手で資金の売買がなされる。産業資本の流通過程で剰余価値を生まない貨幣の形態の資金が遊んでいるのを、銀行を通して他の産業資本に融通すると、その産業資本によって追加的な剰余価値が生産される。つまり剰余価値を生産しない流通費用を資本家社会的に節約することになる。それで利子が支払われることになる。

これに対して商業資本の問題は、流通費用の節約では同じだけれど、この方は商品を売る期間のほうの問題、遊休している貨幣としての流通費用じゃない。もちろん貨幣の貸付でも商品の売買が促進されるだろうが、そこではむしろ剰余価値の追加的生産が目標になっている。商業資本のほうは、直接に剰余価値の生産が追加されるというのではなく、流通費用の節約が商品を販売する期間を短縮するという点であらわれる。これは産業資本にできないというより産業資本に代って短縮するということになる。貸付資本も実際は銀行を仲介にしてはじめて実現されるのだが、しかしそれにしても産業資本同士の関係だが、商業資本の方は銀行と違って商品を買ってその販売を引受けて流通費用を

節約する。こういう関係で両者は同じような任務をもっている。そういうわけで利子論で商業資本を説くことは決して異様なことではないのです。

しかし利子論のほうに出てくる資金というのが、産業資本から直接に出てきて産業資本に融通されるのに対して商業資本の方は独立の資本として産業資本に対立する。もちろんあとでいうように商業資本もその運動過程に生ずる資金をこの貨幣市場に出すし、また貨幣市場から借りるということにもなるが、それは飽くまでも利用するという性格を免れない。商業資本のほうはいまもいったように産業資本の作った商品を買ってしまふ。それは資金を融通するのは全く違ふ。同じ流通費用の節約だけでも、商業資本は商品を買って上げて、産業資本では相当期間がかかる流通期間を短縮する。そこでその期間の負担を少くするので、産業資本から商品を安く買うことができる。そこに商業利潤の根拠がある。これはマルクスもだいたいそういうことを商業資本についてはいっているんです。しかしどうもそこが明確に説かれていない。それは元々、流通費用の問題が利潤論で明確に考慮されていなかったからだといつてもよいのではないかと思う。産業資本の一般利潤論のあとへ商業利潤論をやるといのが、ただ利潤論を商業利潤で補足するということになり、そのうえで利子論をやるといのが、これも資本関係の特殊のものとして扱うということになっているように考えられる。しかし貸付資本は、特殊の独立の資本ではない。これに対して銀行資本はその仲介者として独立の資本になる。だから銀行資本は利潤を与えられなければならないが、貸付資本は利子でよい。この点が明確でないと利子論はうまくできないし、商業利潤論をそれと関連せしめることもできなくなる。

私のこの商業利潤論というのは他の部分と同様に大いに問題にされ、今も論争がつづいているといつてよいのですが、問題は特に『資本論』でうまく片付いていない商業労働者の賃銀に帰着するといつてよい。

賃銀も商業資本にとっては資本なんです、商業労働者というのは商人の労働のかわりをするので、その労働は剰余価値は生産しない。しかし賃銀を払って労働者を雇うと、その資本には利潤が与えられるのでなければ意味がない。その労働を商業資本家が自らやれば、賃銀はないし、また利潤もつかない。どうしてそういう関係になるかというわけだが、マルクス自身それがいいぐあいに解けてないんです。なんでもないことなただけで大変な苦勞をしている。

前にいったように商業利潤の根源が流通期間の短縮による流通費の節約という、つまりマイナスになる費用をマイナスするということにあることが明確になっていけば、賃銀労働者がそれをさらに一層節約して賃銀に対する利潤をも得させるような、そういう関係ができてくるということは、すぐわかる。余りに簡単な解決なので私にも少々心もとなく、これでよいのかと思えるほどですから批評のあるのも当然だが、どうも批評をみてもほかに考ようはない。それは商店を開いたりするのと同じにその費用をつぐない、その利潤もえられる程に流通費用が節約されるというわけです。投じた費用の回収と、それから利潤を計算しても成り立つんでなければ、資本を投じる意味はない。商人自身が自分で働くと、その働きに対しては利潤は出ないんでマルクスも困ったわけです。商人としては自分に賃銀は払わないから、ただ、買入れた商品に対する代価、それに対する利潤を他の産業資本と同様に得られれば、商業に資本を投じてよいわけです。そこに産業資本の一般利潤率によって決定される商業利潤があるわけで、そういうほかにない。マルクスもだいたいそう考えることになるのではないかと思うんですが、その点明確になっていない。

商業資本と産業資本との関係、それから貸付資本と産業資本との関係の、その関連が、『資本論』の場合には商業資本のほうがかえって利潤論へすぐついて、そしてあとから貸付資本を説く。そこで何かこの方が外から来る関係の

ようになっていゝ。實際はそうじゃなくて、貸付資本のほうが、産業資本の中できる遊休貨幣資本を資金としてお互いに貸し合つて、それで流通費用を節約する。だから直接的なんです。商業資本のほうは商品を買入れて、そして売る、その流通期間を短縮するんだから、産業資本にとっては、むしろ外になる關係、その順序が『資本論』で利潤論から商業利潤、それから貸付資本の利子ということになったんで、その点が問題を残すことになり、二つとも十分に展開できなくなつたんじゃないかと思う。そしてそれが結局、いまの資本關係の物化、資本の物神性の完成にも影響してマルクスも混乱している。つまり、資本はそれ自身に利子を生むという規定ができなくなる。

はじめに貨幣資本家が機能資本家に資本を出して、そしてそこから利子を得ているということになると、利子の根拠が不明になるばかりでなく、資本がそれ自身に利子を生むという、商品經濟の物神性の極致をなす資本の物神性の方は説けなくなる。これをマルクスは後に梨の木に梨がなるように、資本は利子を生むというふうにいっているが、マルクスでは、貨幣資本家が機能資本家に貨幣を出すときから資本は物神化している。もっともそのときは資本は、利潤を生むものとして商品になるという。利子を生むものとしてではない。後に物化を説くときには利子を生む物として貸手は自分の貨幣を売るといっているが、これでは全く利子の意味がわからなくなる。利子は商品としての資本の代価として支払われるものではない。前にいったように貨幣を一定期間貸付けて、その代価としてこそ意味がある。それを最初に資本を商品として売って、それから利子を得ているというから混乱する。それも最初は利潤を生むものとして資本が商品になるという、後には利子を生むものとして貨幣を売るといふ。これでは資本の物神性が説けないのは当然といつてよい。

私は、この点は必ず最初の貸付資本のとき資本でなく、貨幣が商品となることを明確にしなければならなかつたも



のと思う。この場合には資本はまだ物神性を完成してはいない。マルクスは機能資本家の得た利潤が、貨幣資本家との間で分割されるところから質的な分割に移ることを説こうとして苦心するが、質的な分割に移りようがない。というのは、貸付資本で支払われる利子というのは、これを貸付ける人と、貸付けられた人との間で、また貸付けられた人がそれを利用して剰余価値の追加的な生産をやって、その一部分を利子として払うんで、ちゃんとその根拠がある。資本がそれ自身に生むというような物神性をあらわす利子じゃない。ほんとうに物神性を完成してはいないんです。それ自身に利子を生むとはいえない。だから最初は利潤を生むものとしていったわけです。後に利子を生むものとして外化するといっても、単なる貸借関係からはそうはいえない。これは貨幣市場をみればすぐわかる。

貨幣市場の利子は、貸手と借手とでその需要供給で決まる。もちろん銀行が中心になってだが、始終上下している。それは物神化して資本の属性ということにはなっていない。この物神化は商業資本を通してはじめて実現する。私は考えている。商業資本家が自分でやる商業労働は、一般に資本家の労働を代表するものといってよい。資本家も労働をしないわけではない。ただ物を生産し、価値、剰余価値を生産するということはない。資本家はいろんなことを考慮して物を買ったり、売ったりする、これが仕事、商業資本はそれを純粹に代表しているわけです。商業資本家は商品を買集めて、それを売る。そこで資本家の労働を代表するといっても極めて特色のある点で代表する。すなわち資本家にとっては、直接はもうけにやらん費用をなるべく節約するという、資本家社会的にマイナスとなるものをマイナスするという点で代表する。もっとも産業資本家も資本家としては商人的であって、安く買って高く売るということを一時も忘れるものではない。産業資本家となれば価値で買って価値で売るものと考えるのは大間違い、ただ競争でそうなるというだけで、理論はその点で価値の形成と増殖を論証しうることになるわけだが、それはともかく商

業資本は、いわばそういう競争の部面を引受けたような恰好になって、資本家の労働を代表する。それと同時に商品の買入れには、できる限り信用によって貸付資本を利用する。商品の売捌きには、しかし原則としてそれを利用するわけにはゆかない。つまり買うときには手形で買ったものをできる限り速かに売る。それが彼の資本家としての腕前になる。そこで買入資金に対しては利子を支払いながら得た利潤は当然に利子といわゆる企業利潤とに分かれてくる。借入れない自己資本に対しても同様の分離を移入する。全体の利子を差引いてあとに残る利潤部分は、自分の働きのよって得た利潤だという観念ができる。それが一般的に利子に対する企業利潤になるわけです。それはマルクスのいうように貨幣資本家が機能資本家に資金を出して利子をとるというのではなく、また産業資本家の遊休資金が銀行を中心とする金融市場を通して互に融通される場合に生ずる利子で直ちに企業利潤という概念ができるわけでもない。それは資本家が利潤を自分の労働で得たものと観念しうるような関係を通さなければならぬ。商業資本家は資本家の労働を代表するものとして、また貸付資本を非常によく利用しうるという地位によってこの観念を形成する。もちろんそれはもともと商人資本的なるものとして資本家である、一般の産業資本家にも容易に移入させる。そこで資本はそれ自身に利子を生むという観念が一般化してくるわけです。その場合、資本がそれ自身に利子を生むというときには、この利子は貨幣市場の利子を反映したものではありませんが、直接にそれではない。

いままでこの点が明確でないために貨幣市場と資本市場との区別がいくぐいできていないんです。資本市場では利子率は積極的にはできない。貨幣市場でできた利子率を反映して、資本は利子を生むものとして売買される。これは具体的にいえば、株式市場にあらわれている。そこに金融市場と資本市場との関連が明らかになる。株式は金融市場で形成される利子率を借用してその相場をつくりながら売買されるわけです。ところが売買されるだけなしに

増資をしたり、新しい株式を募集したりすることになれば、金融市場に集る資金と、株式市場へいく資金とが互に融通しあうことになる。たとえば金融市場で利子率が上がれば、株式市場の株の相場が下がってくる。利子率が下がれば、株式市場の相場が上がるということにもなる。自分自身では利子率を形成しないが、相場を通して資金が株式市場と金融市場との間を動くというそういう機構ができる。ここではじめて資本が商品になる。これが資本市場、これに対して金融市場では貨幣が商品になる。利子は商品としての貨幣の代価、資本市場でこの利子率を反映しながらそれ自身に利子を生むものとしての資本、いいかえれば擬制資本が売買される。もちろん、どちらも本来の商品をなすわけではない。しかし資本家的商品経済は、こういう機構をもって全体の特殊歴史的な構造を補強する。それはともかくこういう関連で資本はその物神性を完成する。マルクスのいうように貨幣資本家と機能資本家との間で利潤を分けるというのでは、資本の物神性の客観的根拠は説明できない。悪くすると貨幣の蓄蔵に基づく前時代的な物神性で片付けられるということにもなりかねない。梨の木に梨がなるという例は、どうもそういう感を与える。

しかしまた私のいうようにして資本の物神性の完成の根拠が明らかになっても、経済学の原理では株式市場は説けないという、非常にむずかしい問題がある。

そこでこの資本の物神性、つまり資本がそれ自身に利子を生むものとして現われるということは、原理的には、資本主義の理念をなすものと考えざるをえないのです。これはヘーゲルの言葉を借りてそういったわけです。もっともヘーゲルがわかって借りたわけではないので、そんなことはどうでもよいのですが、資本主義のイデーというわけです。物神性としてはその方が適しているともいえる。

要するに資本は、貨幣としても生産手段としても、商品としても、遊ばしておけないということが、資本主義のイ

デーだというわけです。それは不断に利子を生みつつあるので、遊ばしておく利子を失うことになる。商品も、貨幣も、生産手段も、また工場に雇った労働者も、資本としては一時も遊ばしておけないというのが資本家的精神だというわけです。それを例えば営利的にそう考えるというのでは物神性とはいえない。もっと根本から、いいかえれば資本家的商品経済の機構からそうなっていることを明らかにするということなのでなければならぬ。ところが、いまもいったように、その具体的あらわれとしての株式市場は経済学の原理じゃ説けない。

最後にこの点について、私の考えを述べておきたい。

株式市場というのは、これは土地の場合もそうなのですが、資金を持っている人が株券を買ったり、土地を買い、それによってその資金に対して資本としての利子を与えるということになるわけで、これはわれわれが日常的にみていることですが、こういう資金の所有者というのは、経済学の原理では扱えないのです。原理論では資本として投じうる資金をもっていれば、利潤が得られるはずなんです。もしそれが産業資本として投ぜられてその運動過程で形成される資金であれば、金融市場で貸付資本として利子をうるということにもなる。それは一時的な利殖にすぎない。株を買うとか、土地を買うということは、実際にあったとしても原理的には説けない。例えばそういう資金で土地を買った資本家では、地代は説けない。株券を買った場合でも同じで単に利子をうるだけの投資をするという資本家は、経済学の原理では想定できない。こんなことをいうと、現実を無視したものといわれるかも知れないが、マルクスが『資本論』を書いたときには、こういう想定も無理ではなかったのか資本主義は発展するにしたがって理論的に想定される資本主義に近づきつつあるものと考えられたのであって、またそれによって『資本論』のような原理論の体系ができることにもなった。ところがそのマルクスが利子論では、原理的には想定できない貨幣資本家と、機

能資本家とをもちだしてきたので、この問題は利子論や株式会社論によって改めて考えてみるべきものとなる。事実、株式会社の資本家ということになると、原理的には規定しえない二種類に分かれる。単に配当を受けるだけの、いわゆる普通株主と普通株主の資本を自分の資本と同じように利用する大株主、いしかえれば会社を支配する資本家とに分かれ、この関係は原理的には規定できない。

第一に普通株主は資本家としての機能を積極的にはしない。土地所有者であったり、他の事業の資本家だったり、商人だったり、俸給生活者などだったりする。原理がこういう複雑な資格をもったものを規定しようとすると、必ずその基本的規定を不明確にする。現実にもそういうものがあることは事実で、それは原理的規定を基準にして分析し、解明すればよいので、こういうものを原理的に規定することによって原理的規定を放棄するのは、科学的方法とはいえない。

第二に、大株主のほうも、こういう普通株主の存在によって自分の資本以上を支配しうることになる。ちょうど普通株主が資本家として失うものを委譲されるわけで、大株主のほうも原理的に規定するわけにいかない。それはちょうど独占利潤というのを原理的に規定しようとする、利潤の一般的な規定は失われてしまうのと同じで、マルクス経済学がいわゆる近代経済学と違う点もそういう点にある。

第三に、今いった株主資本家が二種類に分かれるということに関連していることといつてよいが、株式会社の利潤が配当として分配されることになると、その処分の仕方はまた原理的には規定できない。大株主が決定して、普通株主には利子に相当するものをやればよいということにもなる。普通株主としては配当は多ければ多いほどがよいと考えるのに対して、大株主としてはむしろ株式会社を代表する地位につくことになる。これも本来の資本家とはいえない

いもの変ってくる。要するに資本家が双方で変化してくる。これは経済学の原理で解明すべきものではなくて、株式会社制度が一般的にあらゆる産業に普及した時代、いわゆる金融資本の時代をとって規定しなければならぬ。その場合の規定は原理的にはできない。もちろん原理的に規定される資本とか、利潤とか、利子とかを前提にしなければその規定は与えられないが、これを原理的に規定した経済学の基本概念と同じように扱うことはできない。先きにあげた独占利潤を一般的に規定するのと同様、基本的規定を台無しにする。

マルクスは、地代論を説く場合に、土地所有者から資本家が土地を借りて労働者を使用するという、いわゆる資本家的土地所有を想定して論じ、これに対して実際上はそんなものでない諸形態をもって反対する主張に、そういう異論は、資本家的土地所有が歴史的なものでなく、永久的なものとする説にこそ適当であるが、自分のように歴史的理論には無意味だということをしている。マルクスの場合、土地所有も資本主義の発展と共に資本家的土地所有を實現すると考えてよかつたので、そうもいえたのであるが、われわれの場合はそういっただけでは片付かない。資本家も原理で与えられた規定だけでは片付かない株主資本家のようなものが一般化してくる。そこで逆に経済学の原理で与えられる規定はどういう風にして得られ、どういう風に使用したらよいかというようなことを考えなくてはならぬことになる。それと同時にマルクスが経験的事実によって想定した貨幣資本家と機能資本家というような、原理的には問題にならない想定も再検討することが必要になる。

『資本論』の利子論は、その点では最もよい材料を提供してくれる。もちろん『資本論』の利子論が全部間違っているというのではなく、マルクスはこの部分でも非常に沢山の資料を扱って論じているのであって、その理論的展開には学ぶべきものが非常に多い。利子論が間違った想定で始められても資本の物神化を説こうとした点は、たとい成

功していなかったとしても、やはりマルクスらしい、極めて重要な意図を示しているといつてよい。また擬制資本の規定のような重要な概念も与えている。銀行信用に関しても同様である。ヒルファディングのように『資本論』の規定をそのまま使って、その上に金融資本の規定を与えるといういうことも、今まで述べてきたことからいって賛成するわけにはゆかないが、しかしそれでも『金融資本論』ができたのを見ると、『資本論』の偉大さがわかるように思う。

『資本論』の所説を私は屢々批評し、もし訂正してよければ訂正しようではないかといつてきたのは、『資本論』の規定がそう簡単に間違っているといつて済ませないと思うからです。しかしまた『資本論』は一言一句動かすことができないものだと考えるのは、『資本論』の偉大さを真に理解し、尊重するものではない。利子論、商業利潤論は、まさに未完成のものだけに、われわれにとっては『資本論』を学ぶ場合にそういう点を考えるのに最も適している部分といつてよい。



大体、以上のようなことを最終講義で利子論として述べたつもりですが、あと何か問題を出してもらえると補足的に述べることができるとは思いません。

問 マルクスの利子論はやはり商品取扱い資本に対して貨幣取扱い資本というように展開したということが影響しているのではないですか。

——そうかもしれない。貨幣取扱い資本というのが銀行の前身のようなものとして出るので、貨幣というものは取り扱うといっても、商品のように売らなければならぬものではない。商品取扱い資本が商業資本へ発展するような関係はない。それは貨幣の両替とか、保管するとか、代って支払をするとか、という銀行になると附随的な業務になるものをなすにすぎない。銀行が取り扱う貨幣はまるで違った性質のものになる。貨幣取扱資本のやったことは、その点では問題にならない。あそこで商品と貨幣を並べて取扱い資本といったのが、悪かったのではないかと思う。問題は、しかし利潤論で産業資本の流通費用をどう扱うかということにあった。産業資本自身ではそれが処理できないということが、もっと明確にされていたらあいうことにならなかつたのじゃないかとぼくは思っている。

これはしかしまだ問題になっている点です。しかしこの点から片付けてゆかないと商業資本論はできない。しかも商業資本論が明確になると、利子論との関連も明確になる。利潤論を一般的にやったから商業利潤論をやるといふのはよくない。利子論でも銀行資本の利潤論がある。

それにしてもいちばんおもしろい問題は、ぼくはやっぱり物神性だと思う。これによって始めて資本市場と貨幣市場とを区別することができる。この点はしかしマルクスだけじゃなしに、ほとんどあらゆる経済学者がはっきりと区別してない。キャピタル・マーケットとか、マネー・マーケットとかといいいながらそれがどう区別されるかというところは、はっきりしていないんです。これは一般には資本概念が明確になっていないのでマルクス経済学以外では当然なのだが、それだけにマルクス経済学では是非明確にしたい。

日本では資金ということばがある。これが外国にはないのではないか。ファンドといつても、ミッテルといつても



違うんです。資金ということばは実にいい。ぼくもこの通俗語を使うのをはじめちゅうちょしていたんだが、これは『資本論』でいえば、貨幣としての貨幣にあたると思ったのです。ところがそれが少々うまくない。マルクスは貨幣としての貨幣いうのを、略して、貨幣、としているんです。価値尺度としての貨幣、流通手段としての貨幣、貨幣としての貨幣ということになるのだと思うが、それが貨幣になっている。これは資金としての貨幣とした方がいいと思つたが、その最初が貨幣の蓄蔵となっている。そうするとこれは資金とはいえない。もっと富の一般的形態として貯蓄の目的になる。資金というのは、何に使ってもよいもの、自由に使える貨幣として、資本として使ってもよいが、そうでなく、生活に使ってもいい、支払に使ってもよいという貨幣、そういうものとして商品流通から出てくる。蓄蔵というのには少し合わない。それで使わなかったのだが、今は資金が貯蓄にあてられるというように使っている。資本の運動過程にある貨幣は直ちに資金をなすとはいえないが、その運動の過程でも貨幣として遊休している間は一時的だが資金になる。これが商品になって貨幣市場で売買される、これを単に貨幣というよりは資金といった方が明確になるといふわけです。

マルクスはこれを貨幣が資本として貸しつけられるものとして利子を説き、そこですでに資本が商品になるといつてしまったもんだから、資本の市場、資本の物神性の完成した姿というのが説けなくなつてしまった。はじめから利子を生む資本が商品になつてしまった。利子付き資本、あるいは利子生み資本ということばで、貸付け資本と、それからのちに展開される、ぼくのいわゆる、それ自身に利子を生むものとしての資本というのが、両方いっしょになつているんです。マルクスの場合、貸付け資本ですでに貨幣が利潤を生むものとして商品化しているので、先きにもいつたように資本の物神性が説かれていることになる。これは商品になる貨幣を資本といったもんだから混乱してきた

のではないかと思う。資金といえば商品になるのに非常によかったんじゃないか、だから資金市場といったほうがいい、貨幣市場いうと、例えば一〇〇〇円の貨幣が売買される、その代価が幾らかという変なことになる。

問 実際上も長期資金市場とか、短期資金市場とっていますね。

—— いている。日本ではいているんだけど、外国にはないんです。マネー・マーケットです。貨幣になっちゃう。そこに混同がおこる。資金いうことになれば貨幣でありながら流通手段じゃない、流通手段からフリーになっている、なんにでも使える、貸付け資本として一定の期限をもって貸付けすることもできる。もちろんそれは貨幣なんだけれども、資本として動いている貨幣じゃない。資本としての運動過程にある貨幣なんだけれど、遊んでいる貨幣、そういう意味で資金になるわけです。資金ということばはいいのじゃないかというのですが、通俗語というのと、外国語にないのでみんな自分じゃ使っているくせに、ぼくがいうと承認しないんです（小笑）。資金市場とって資本市場と区別した方がよい。もちろん金融市場といってもよいが、とにかく資本市場としての有価証券市場、株式市場と区別しないと利子率との関係なんかも明白にはならない。両市場における資金の動きも同様だと思う。

問 それはマルクスのいわゆる「経済学批判」のプランでは一応貨幣市場と資本市場に分けているんじゃないですか。

—— そうだったか知ら……ちょっと覚えていない。そうかもしれない。プランはおもしろい問題を沢山含んではい

るが、具体的には『資本論』ということになる。それはともかくマルクスはやっぱりパイオニアとして偉いと同時にパイオニアらしい欠点ももっているのではないだろうか。物神性という規定についてもそういうことがいえる。商品経済の物神性を見つけたということではえらいことだと思いが、やはりパイオニアらしく早く使いたくなつたのではないだろうか。商品でいってしまった。もちろん商品でいってよいのだが、ほんとうは貨幣でいったほうがいいと、ぼくは思っている。商品でいったんでははっきりしない。殊に買手にとっては商品はその使用価値のほうが主になっている。貨幣なら使用価値自身が価値物になるんで、物神性は先ずここで表われてくる。『資本論』のあの節はおもしろいのだが、物神性の実体的根拠の暴露が主になる。しかしこれでは貨幣での物神性の形態的発現に対しては少しずれたことになる。商品価値の実体で暴露されるにしても、先ず形態的に貨幣であられる点が明確にされていない。ばならない。マルクスはその点を価値形態論でやっているのだが、そこでは物神性として明確には規定していない。

これと似たことが『資本論』ではほかにもある。たとえば変態ということばね、あれも非常におもしろいことばですが、それは運動体としての資本の場合にこそあてはまる。資本が貨幣、商品、貨幣になるというように。ところがそれをマルクスは商品の流通に使ってしまった。しかしこれは適當ではなかった。変態というのは蚕の場合でも、卵から幼虫、蛹（さなぎ）、蛾になる。この全体が変態でしょう。そこで蚕というのは、この全体の運動体としてあるということになる。どこが蚕かということはない。ちょうど資本と非常によく似ている。貨幣で商品としての生産手段、労働力を買って生産資本になり、商品を作って、それが貨幣になってまた帰ってくる。この変態は蚕よりもっと徹底している。むしろこの方に適している。資本は死なないんだから（笑）。しかも卵を生むんだから（小笑）。それこそ運動体としての変態ということになる。商品の変態といっても、これは商品と貨幣とが交換されて貨幣になり、その貨幣

で新しい商品を買うというので、商品としては場所を変える運動です。資本のほうは場所を変えないで自分の姿を変えていく。だから蚕の変態と非常に似ているわけですね。

問　むしろそれは『資本論』の第二巻の問題ではないですか。

——第二巻は資本を運動体として解明しているのですが、変態ということば自身はあまり使っていないです。これもパイオニアとして変態ということばを発見したときに、あまりうれしくて商品の運動のほうに使っちゃったんじゃないかというわけです。しかしそうすると資本のほうに使えなくなった。同じ運動にしても違う。資本のほうは時間的な運動で商品のほうは空間的な運動、もちろん資本の時間的運動も商品、貨幣の空間的な運動を基礎にしなきゃ出さない。その点は資本の運動のおもしろい点で変態の意味が、本家の蚕より明確になる。商品、貨幣の流通を基礎にしながら独自の運動体になる。それはともかく、こういう物神性とか、変態とかという、未だ何人も明確にしなかったものをマルクスははじめて発見しながら、惜しいことにちょっと早く使いすぎているのではないか。人口法則でもそうです。これはちょっと逆になるが、産業予備軍ということばにすぐつけてしまったから折角の規定が産業予備軍に埋没してしまっている。もっともこの方はエンゲルスが若くして天才的に発見したことばで、マルサスに対する規定としては経済学的に未熟なものだった。これをマルクスが理論化したわけだが、どうも産業予備軍という言葉がよすぎてマルクスもこれに引きずられた形になっている。種々雑多のものが入ってきて人口法則としての理論的展開は邪魔になっている。理論的には人口法則の方がたいへんな発見でしょう。

人口法則というのは、労働力商品という資本主義経済の基本的な商品に対する資本の関係を説明するもので、一般の商品の価値論に対するものだと思っていんです。労働力商品は資本では直接は生産できないので、人口法則がその価値の基礎をなすことになる。マルクスもそのことをいってはいるんだが、産業予備軍という規定でその点が明確になっている。もちろんイギリスの資本主義の発展は實際上この産業予備軍を基礎にしてできたものだから、事実としてはそういいたいんだけど、理論的には人口法則に抽象して説かなきゃいけなかったんじゃないかと思う。

問 ちよつと話は違いますけど、三段階論を思いつかれたのは——マルクスの話が出ましたから——わたしは戦前じゃないかと思うんですが。そうじゃございませんですか。

——実際上はそうです。というのは、ぼくは『資本論』を勉強しようという目標をもっていたわけですが、東北大で経済政策論の講義していましたから、そのためにそういうことを考えることになったし、また当時の資本主義論争に対してぼくはいろいろ疑問があった、——ぼくにはいわゆる講座派も労農派もほんとうにはこの問題を解いてないというように考えられた。これは『資本論』自身に対する問題でもあったんだが、後進国の資本主義化をどう考えるかという点、後進国で先進国と同じように資本主義の発展が見られかどうかという、これは誰でも知っているんですが、その点が資本主義論争ではみんな知っていながら、明確に考えられなかった。殊に日本のように、後進国として、しかも金融資本時代に資本主義化した場合にどうなるか、この点に非常に興味をもっていたのです。

つまり原理を日本の分析にどう使うかということを考えていたわけです。ぼくが戦前に書いた論文で、「資本主義の発生と農村分解の過程」というのがありますが、それはその点を『資本論』によって書いたんです。後進国の場

合はつまり農村分解の過程が違うのが当然ではないか、こういうことを書いたんです。イギリスでは資本主義的な農業経営が出るかもしれないが、後進国ではなかなかそれが出ないんじゃないか。こういう問題を書いた。それは原始的蓄積の過程が違うということ述べたのです。今ほど明確にはいつてないが、現状分析をやるにはやはり先進国と後進国を区別しなきゃいけない、それを原理ですますわけにはゆかない。その間に必ずどういつ時代に資本主義化するかという段階論が入らなければいけないというわけです。この問題は実は大変なことを含んでいたのです。

東北大学で昭和十一年に、ぼくの友人が病氣したために経済原論の講義したことがあるのですが、そのときに『資本論』によりながら『資本論』を修正するという、だいたいまの原論のシステムができています。これは今の問題から当然のことだったのです。そういう考えをもったのはその昭和十年前後ですが、大変な問題だったので、まだ一般には発表しなかった。『資本論』を問題にするということは、戦前にはぼくにもできなかったのです。

話が横にそれてしまったですが、なお日本資本主義論争に関連してブルジョア革命についてどうもこれを社会主義革命と直接に比較するという考え方にも、その当時から疑問をもっていた。最近では段々とその点が明確になってきたのですが、ブルジョア革命というのは、もちろん大変なことではあっても商品経済の発展を阻害するものを除くということに帰着するが、社会主義革命というのは社会主義者によって資本主義に代るものを作ってゆかなくちゃならない。例えばいまの利子論で論じた機構にかわるものを作るといふのはたいへんならうと思うが、そうしないと社会主義は実現されない。その点大変な問題になる。少くとも生産手段を遊ばしておけない。資本主義は労働者も生産手段も遊ばしておけないという、非常にエコノミカルな処置をとるようになってきているが、社会主義でそれをどうやって資本主義に負けないようにやれるかというのはいへんな問題です。こういうことを考えるというのも、経済学の

原理と社会主義運動の關係が明らかになっていないとできない。三段階論による原理論の体系的完結というのと関連するのです。

問 原蓄がイギリスみたいな形でいくのはイギリスだけだったようなことを、ちょっとマルクスもいつているところがあるんですね。

——それはマルクスもたしかに認めているのですが、しかし、後進国がその資本主義化を如何なる段階でやるかによつて異なるという点は明確にしていなかった。

問 工業のほうはだいたい同じにいく……農業のほうは……

——しかし工業も、先進国で得た成果をすぐ輸入するので、その影響が非常に大きいわけです。ぼくはそこを人口問題にかけたわけです。つまり農村の分解を比較的に行らないでもやれる。後進国の農村の年々の過剰人口をもってやれるので特にエンクロジアのようなドラスティックな方式を必要としないわけです。日本でいえば農村の次三男や子女の労働で十分に近代的な機械工業を發展せしめることができたのです。原始的蓄積による農村分解をイギリスのようにやらなくてもできたわけです。この点が日本資本主義に当然考慮されなければならないというのです。

◇

なお最終講義では最後に資本主義の階級性について述べたのですが、これは私の『原論』でも最後の章になる。資

本主義は商品経済として当然だが、表面的には階級性を示していない。つまり商品売買の自由と平等の世界をなすわけです。それを経済学的に分析すると階級関係がわかる。同時にその階級関係で、はじめて封建社会や古代社会の階級関係もその基盤を解明される。つまり剰余労働の基盤が一般的に明らかにされる。しかし資本主義自身では立前としては階級社会ではない。それがイデオロギーとしては法律になってあらわれているわけです。政治でなく法律をイデオロギーとしている点が重要なのです。自由と平等と正義になるわけです。法律学者からいえば、階級関係はない。経済的にも資本家と労働者と土地所有者との関係は、表面的には階級関係ではない。経済学的分析をしなければそれは明らかにならない。そこで資本主義を経済学で解明するという場合にも、あたまから資本主義を批判するというのではよろしくない。

資本主義は搾取関係を基礎とするといっただけでは問題にならない。商品経済的に自由平等の立場で売買しながらしかも搾取関係がその内に展開されることを明らかにするものでなければ、その点を科学的に明らかにするものとはいえない。搾取ということば自身がすでに階級性を示しているように見えるのでかえってそのことをなおざりにする傾向がでるが、それはいけない。ここでいう搾取は封建社会や奴隷制度のように直接に階級関係によって行なわれるのではない。不当のことをやっているようにとるんじやほんとの搾取関係はわかっていない。すべて価値で売買されながら搾取関係を明らかにするのでないといけない。収奪関係というのは商品経済的にも不当といってよいが、搾取関係はそれではいけない。収奪というのは原始的蓄積で土地を取り上げるように財産を取り上げることをいう。実際上は商品経済的にも収奪が行われている場合が少くないが、それは経済学的には理論的に証明するわけにはゆかない。

経済学的には、資本家的搾取関係を商品経済の法則の内に解明していく、しかもそれは政治や宗教はもちろんのこ



と、資本主義社会のイデオロギーとしての法律関係からも独立に、それ自身に発展する社会として解明する——それが経済学の原理となる。それはヘーゲルの論理学にもあたる体系を、完結した体系として展開するものではないかというわけです。

もっとも私自身は、ヘーゲルを研究したわけでもないし、その論理学を理解したとは自分でも決して考えていないので、そういう比較がほんとは出来るのか、どうかはわからないが、とにかく経済学の原理は、全体系が自立的な運動をなすものとして規定できる。これがまた私の理解している経済学と社会主義との関係を示しているわけです。つまり資本主義は抽象的に一般的にはあるが全社会を完全に認識しようという点で変革の対象になるというわけです。しかしそれはまた『資本論』の重要な規定に反することになる。いわゆる「収奪者が収奪される」という規定がマルクスでは経済学の理論そのもので説けるようにいつているが、私にはそうは考えられない。原理の体系にはそういう展開は入らない。それは理論的に規定できるのでなく、理論的にはあたかも永久的に運動するかの如く体系的に論証されるということが、反ってその実践的変革の根拠を示しているというわけです。もっともそうなると客観的な法則によって、社会主義社会が実現されるというのではなく、今さきもいったように、社会主義は資本主義が法的にやっていることを自主的にやらなければならないということになる。それと同時に、資本主義社会の階級性と共に、一般的に社会の階級性を止揚するということになる。そういう意味で資本主義社会の階級性を原論の最後に説いたわけです。

マルクスも『資本論』の第三巻の最後に地代論のあとの収入の篇の最後に「諸階級」という章をおいている。もっともあの収入の篇はあまりいい篇じゃない。それでも分配関係と生産関係なんかというところはおもしろいですが、

それはともかく最後に「諸階級」を写こうとして中断——というよりはじめたばかりで切れている。それでも資本主義社会の階級を一般的に論じようとした意図はうかがえるように思う。私の場合は序論に対する結論のようなことになってはいるが、資本主義社会の階級性はいまいったように、表面的には非階級的な、しかし内実は階級をなしているという意味で最後の階級社会ということになるんじゃないかと考えたわけです。一方で体系が完結すると同時に、あらゆる階級社会の経済的基礎を明らかにし、階級対立の最後をなすものであることも明らかにされるのではないかといいわけです。

資本家と労働者といえど直ぐに階級関係がわかったようにいうのでは、まだほんとはわかっていない。労働者と資本家とがどういふ関係で階級関係をなすのか、これこそ経済学の原理の課題です。

最近よく独占資本という言葉が使われるが、これはどういふこと意味するのかを明らかにしないといけない。独占資本という言葉はブルジョア的にも不当なものとしてよいものとなっているので、資本というよりは非難の対象として都合がよいかも知れないが、それでいい気になっていると案外自分のイデオロギーのプチ・ブルジョア的性格に満足していることになる。何人でも資本主義社会に住んでいると、その生活からプチ・ブルジョア・イデオロギーをもつことになるので、こういうことは十分に気をつけないといけない。社会主義者としては勿論だが、科学的研究でも独占資本という言葉を使いきると真に資本主義を批判するということになる。公正取引委員会と同じイデオロギーになる。資本自身を科学的に批判的に把握することが大切なので、独占資本は一般的には私のいわゆる段階論で扱われなくてはならないが、その場合には原理的規定を与えられるわけではない。独占利潤も同じで、これを原理的に規定しようとするとならぬと経済学の原理自身が曖昧になる。私は、独占資本——正しくは金融資本というべきだが

——にしても、商人資本にしても、さらに産業資本そのものにしても、資本主義の発展過程であらわる具体的なものとしては段階論的に規定しなければならないと考えている。ここでは経済学の原理がそのままあらわれるのではない。多かれ少かれ非資本主義的な経済と人口とをもった社会として原理を基準にしながら、タイプとして規定するほかはない。帝国主義論は、資本主義の発生、発展の段階における重商主義、自由主義に対して展開されなければならない。それは『資本論』のような原理論にそのまま続けられてはならない。そうしないと原理は自由主義の原理になってしまふ。

スターリン論文でもちよつと面白い問題があった。たしかスターリンは社会主義を一般的に論ずるときにも、一般的資本主義に対してでなく、現代資本主義に対して論じていたと思うが、これはよくない。いわゆる独占資本主義に対比される社会主義は、社会主義一般でなく、現実の発展段階の社会主義になる。特定の社会主義になる。これを直ちに一般的な社会主義として主張するのは筋が通らない。一般的な資本主義に対して一般的に社会主義を規定した上で、そういう特定の社会主義を考えないと飛んでもないことになる。スターリン論文にはそういう点に問題があったのではないか。この基準があつてこそ具体的な社会主義についてもその発展が考えられることになる。さらに具体的には特定の国の社会主義ということも現状分析できるのではないか。私はズット前にある人々とこの問題を論じたとき、その人達はソ連の社会主義を直ちに社会主義そのものようにいうので、そのことを注意したことがあつた。社会主義にも発展段階もあれば、特定の国の特殊の事情もあるわけで、すべて一様というわけにはゆかないのが当然だろう。この点も資本主義について原理と段階論と現状分析の、いわゆる三段階論がないと明確にはならないのと同じ関係があるのではないか。

もちろん経済学の原理に対応して社会主義の原理が法的に規定されるというのではない。段階論、現状分析についても同様である。こういうわけで私は、経済学の研究が三分野に分かれ、原理論は体系的に完結したものになるという事を明らかにするということは、極めて重要なことだと思っている。

なお『資本論』の最後の章で「諸階級」を論じようとしたマルクルの原稿が最初のところで切れてしまっている点で非常に残念に思うのは、土地所有の地位についてマルクスの考えをもう一歩踏みこんで聞けなかったということである。地代論が利子論のあとについているあの順序は、どうも資本主義社会には必ずしもなくてよい土地所有者というように考えられていたのではないかと思えるんです。たしかに土地所有者は資本主義社会でも寄生虫的存在なのだが、資本主義になくてよいというものではない。この点、マルクスはよく知っているし、私もマルクスからそれを学んだんですが、しかしマルクスも、レーニンも他方では資本主義にとって土地は国有になってもよいように思っている。この点はやはり資本主義と土地所有との関係を、もっと明確にしておかなくてはいけなかったのではないかと思う。資本主義では土地は国有になっても私的な性格がなくなってしまうということになります。例えば国から借りた土地は必ず又貸しされる点を考えてもわかることです。ところでマルクスが地代論を利子論のあとにおいたという事は、私にはその点に何か不明確のものがあつたのではないかと考えざるをえない。地代は、利子よりも、利潤にいわば近い関係にあると私は考えている。利潤論は先ず地代論で補足されなければならぬ。それは無産労働者が土地私有に基いて出るといふ原始的蓄積に対応した関係だといってよい。マルクスが地代論を利子論のあとにもつてきたというのは、その点を不明確にするんじゃないか。クラシックのなごりじゃないかという気がする。この点は、しかしなお大いに攻究されなければならないことと思つてゐる。マルクスは地代を前にもつてくる考えをもつて

いたこともあるようだが、『資本論』では結局そうしなかったというのは、なにかクラシックの考えが残っていたんじゃないか。こういうふうに思う。実際、体系が完結するのはやっぱりイデーにもっていかなくちゃならない。私はそういうふうに思うんです。それでこそ最後に資本主義社会の階級性を論ずることもできるというわけです。

なお、経済学で論理学が具体的に展開されるというと、友人の哲学者諸君は、それでは自分らは何をすることになるのか、哲学はなくてよいのかというのですが、そういうわけではない。論理学はいわば科学としての哲学、これに対してイデオロギーとしての哲学、これは唯物論か、観念論かという問題、これはやはり論理学と区別すべきだと思う。これはもちろん経済学の原理論からの推論なので哲学者諸君に考えて貰わなければならぬ。もっとも経済学の原理が論理学を具体化するものだといっても、経済学の方でもまだまだその体系が完成しているわけではないし、またその体系の内部構造も哲学的に解明されているわけではない。いいかえればこれはいわゆる弁証法論理学として一般化されて始めて解明されるのではないかと思うわけです。イデオロギーとして哲学はこれに対して実践論として展開されるべきものと考えています。今もいったように、こんなことは私の経済学からの推論にすぎないので、問題を出されてもお答えできるといふわけではありません。私が最近に考えていることを述べてみただけです。蛇足とでもいふべきものでしょうか……。

問 先生はヘーゲルと『資本論』との関連に非常に関心をもっておられるわけですが、日本では梯(明秀)さんの仕事とか、武市(健人)さんの仕事とか、それから、古いところでは三枝(博音)さんの仕事などあるんですが、あれについてはどういふふうにお考えでしょうか。

——そういう哲学者諸君のやり方はぼくとは方向が逆なんじゃないかと思う。ぼくはやはり経済学のほうからいったほうがいいんじゃないかという気がする。梯君のものはよく読んでいるわけではないが、どうも経済学を哲学でやるというように思える。労働価値説なんかも哲学のほうが先に出ちゃって……

問 中身がないわけですね。

——ええ。前に梯君はぼくを批評していたことがあって、ぼくも多少読んでみたのですが、ぼくには答えようがないし、答える必要もないと思ったことがあった。この間もある大学の学生がきてその話が出たときいったのだが、黒田寛一君がよく梯君とぼくとを並べるんだけど、あれは非常に困る、と。ぼくは経済学をああい哲学で補足できるものとは考えない。もっと『資本論』そのものによって論理学をやるべきだと思っんです。武市君は非常によく知っている東北大学時代からの友人なのですが、彼は神戸高商を出て、東北大学で哲学やったんで、最初は教室で、ぼくが先生になって彼が学生だったわけだが、そんな関係ではない非常に親しい友人です。年もあまり違わない。彼はヘーゲルの研究から『資本論』をやったわけですが、しかしぼくにはどうも『資本論』の展開をそのまま論理学化したという点に大変な問題があるように思う。『資本論』自身の展開なお訂正すべきものがあるのではないかというわけです。ぼくは武市君らによく『資本論』から学んだと思う弁証法論理を話してみてもたしかめたことがあるが、ヘーゲルの方はぼくにはよくわからなかったので彼から教わるということとはしていない。今でも時々ローギックは読む

がドイツ語はわかってても、論理はどうもよくわからない。何かあるようには思える。この二つの偉大な著作は何とかして結びつけたらと思うが、仲々大変なことです。

ぼくの前論は、つまりぼくなりのその試みといってもよい。実際、ぼくは前論の展開でゆきつまると、ローギックのそれにあたるところを読んでみて、わからぬなりにヒントをえたことが時々あった。これも『資本論』の訂正と同様にぼくらに独力でやれることではない。哲学者諸君と経済学者の協同で大いに研究すべきことだと思う。

〔注記〕

この稿は、宇野教授の最終講義が録音されなかったので、後で教授に講義について話していただき、さらにそれに手を加えていただいたものである。——編集委員会——